



# 教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1986

発行所

財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
☎(0797)31-3452



## 沈黙の師マリア

「ああ、幸せなこと、主から言われたことの実現を信じた方は、（ルカ1・45）こう記す福音史家は、私たちをエリザベトの家からナザレトの家へ、二人の女性の間の話から神のおことばへと、連れ戻してくれませぬ。処女マリア、そして人類との対話の口火を切るのには神ご自身です。最初に話すのはいつも神なのです。はじめに御言葉があった。（ヨハネ1・1）ということとは、司祭、修道者のみなさん、霊的生活において私たちが最初にすべきことは、神のおことばに耳を傾けることです。はじめに神のおことばを聞かなければ応えることはできない、はじめに耳を傾けぬ限り、何を言うこともできません。沈黙と黙想、読書と観想——これは人となられた神のみことばに耳を傾け、またそれを宣言する私たちの召命と奉仕の生活にとって欠くことのできない要素です。こう考えると、

マリアは私たちの模範であり、助けであります。福音書の描写によると、マリアは沈黙を守る人、沈黙のうちに耳を傾ける人であることがわかります。マリアの沈黙こそ、御言葉の発生源なのです。マリアはすべてを心に留め、それらが熟すのを待つ。お告げのときも同じで、神のおことばに耳を傾けているかと思ふと極めて自然に対話を始める。ところで神との話し合いでは、私たちが話しかけることができ、神は私たちの言うことに耳を傾けてくださる。ですから神に申し上げましょう。心を悩ます問題を打ちあげなさい。日々あなたに示してくださる慈しみと、あなたを通して人々にお与えになる賜に対して大喜びで感謝の心をあらわしてください。あなたの世話に委ねられていて子供や青年、妻や夫、高齢者や病者を、神の御前に差しだしませう。聖務を果たすにあたり出

遭う困難や失敗を、御前に差しだしませう。あなたの心配事や苦しみの主にさし出すのです。司祭、修道者のみなさん、祈りは私たちの召命の欠くことのできない部分をなしています。祈りの大切さに勝るものはないので、たとえ緊急事と思われるようなことであっても、祈りの次にしか来ないのです。たとえ人々に仕えるためにまだまだ時間が足りないと思えるときであっても、静かな観想と祈りのための時間を確保しておかねばなりません。祈りと仕事は別々にならなければならないのです。日々、仕事について考え、仕事を神に委ねるために神の御前に居る時をつくるなら、そのときこそ仕事は祈りに変わって行きます。

祈り方を身につけましょう。特に『教会の祈り』(Liturgia horarum)と聖体という宝に頼りましょう。この二つこそ他のなににも増してみなさんの伴侶となるべきものです。主の学舎で祈り方をなさい、皆さん方御自身が祈りの「師」となって、みずからの世話に委ねられている人々に祈り方を教えることができるようにならねばなりません。祈り方を教えてあげれば、あまり明瞭とは言えなかつた信仰も明らかな信仰となります。祈りという手段を使うと、人々をふたたび神のもとへ引き戻し、人々の一生を目的や意義をもつものにするのができるのです。

みなさん、神のおことばは私たちが沈黙へと導きます。内なる自分に向かわせ神との出会いに導いてくれるのです。しかし、私たちが互いにバラバラになるといふわけではありません。神のおことばは孤立させるのではなく、一致させますから。天使との対話の沈黙のうちに、マリアはエリザベトの懐胎を知りました。そしてこの対話の沈黙から出てまっすぐに山地のユダへと向かいます。神がエリザベトのためになされたことを知ったマリアは、神が自分のために何をしてくださったかをエリザベトに告げます。そのときすばらしい祈りが生まれました。「御身は女のうちに祝せられ、御胎内の御子イエズスも祝せられ給う」。これはマリアのあいさつを聞いたエリザベトの返事でした。そして、私たちが日々唱える「マニフィカト」はマリアのエリザベトに対する返事だったので、神は私たちをお呼びになるだけでなく、神の呼びかけ(召命)を受けた人が、異なる召命をうけた人々を理解し、受け入れることのできるよう助けてくださいます。

信じる人は幸せ

マリアツェルの聖母像のかたわらでみなさん方にこうしてお話できるのを大へんうれしく思います。神の御母、教会の母として、聖母は、歴史のなかで御子の使命を継続するすべての人々の母親にはるかに勝る母であります。自らの召命と天使のお告げに無条件で応じるマリア、ましましみを示す神を称えるマリア——この母を眺めて私たちは、私たちが自身の召命の神秘と意義に気づきます。マリアが、選ばれしとして与えられた使命を忠実に果たしますと答えてくださったおかげで、御言葉は彼女のうちに歴史的現実、つまり人となられたのです。こうして、神の永遠からの御計画が実現しました。これについて聖パウロは次のように記しています。「神はあらかじめ知っている人々をみ子の姿にかたどらせようと予定された。それはみ子を多くの兄弟の長子とするためである。」(ローマ8・29) 天使のことばに全幅の信頼をおいたがために、処女マリアは神の救いの計画の中心人物となったのでした。マリアが母となったがゆえに、神の御子は私たちがみな兄となつてくださったが、それは私たちが正義と栄光において御子の姿に

**お知らせ**

下記のバックナンバーおよび専用保存ファイルは在庫切れとなりました。

1981年	3月	号
1981年	6月	号
1981年	11月	号
1982年	4月	号
1982年	5月	号
1982年	10月	号
1982年	11月	号
1983年	8月	号

かたどられた者となるためでした。聖パウロは次のようにも言っています。「召し出した人々を義とし、義とした人々に光栄を与えられた。」(ローマ8・30)

人間がいつも聖なる三位一体の光栄に与ることができるようになったのは、処女マリアの忠実な「フィンクト」により人の子となられた神の御子イエズス・キリストを通してでありました。まことに「信じた方は幸いです」。人々は世々に幸いな女と呼ぶでしょうから。(…)

私たちも信じたわけですから、幸いな者となることでしょうか。ただし、マリアのように神との一对一の個人的な出会いから出発して、神のすばらしいみわざ、すなわちマリアの胎内で、その子キリストにおいて、そしてその兄弟である私たちのうちに実現した偉大なわざを、今日、山や谷、そして諸大陸の住民に、告げることによって、イザヤ預言者が語るように、「見よ、やみは地を覆い、濃い霧が異国を包む。だが、おまえの上に主は輝き、その栄光は現われる。」(60・2) 処女マリアの信仰のおかげで神の光が輝き、新しいエルサレムを照らし始めました。それは、いと高き御者の光栄です。あるいは、始めに全ての人間一人ひとりを照らしたが、いま、イエズス・キリストのうちにいる全ての人をまばゆいばかり完全に照らし出そうとしている光である、とも言えるでしょう。だからこそ私たちは宣言せよと招かれているのです。「立て、輝け、光がこられる。主の栄光が昇る」と。(60・1)(オーストリアのマリアツェルで)

# 学校は教会の救いの わが子の一翼をになう

カトリックの学校の本来の目的は人間として、またキリスト信者としての人格の完成をめざすことと、信仰を成熟させることです。キリスト信者にとってこの二つは、一つの現実の二つの面のようなものです。

知・情・意を合わせた全人格的な成長を推し進めるためには、新しい世代の人々の目を文化や真理に向かつて開かせ、基本的な自然徳が身につくよう教育をほどこさなければなりません。永遠の価値というものの内容を守りつつも、変化の波を無視せず、それらをうまく解き明かさねばなりません。

現代の社会を見渡してみると、明るい面もたくさんあるにせよ、残念ながらそれ以上に暗い影に覆われた部分が多く目につきます。否定的で危険な要素がたくさんあります。あいまいさ、さまざまなイデオロギー、不正、暴力や、野放しで公にされる性の氾濫から麻薬に至るまで、種々の誘惑：どれもみな、人間形成をめざす教育の営みを空中分解に追いやるようなものばかり。とりわけ無防備な若い人たちは、まっ先にえじきになってしまいます。

悪の力をくいとめるために、カトリックの学校は最善の備えをしています。福音の教えに照らされ生かされている秩序だったものの見方や、

人を「自由にする」真理そのものであるキリストがお教えになったように神と共に生きることを教育の柱とすることによって。

カトリックの学校は、子供や若者に人類文化の総体と救いのメッセージをうまく統合させうる教育のプログラムを提供し、新しい被造物として、また市民としての責任を果たしつつ生きてゆくための手助けをします。

このように見てゆくと、今日、とりわけ今日の、カトリック学校は、教会の救いのわがの一翼をになう、若者たちの文化的・人間的形成のために、また社会全体のより良い未来を築くために、不可欠の役割を持っていることがわかります。

## 家庭と教会の協力者

カトリック学校とは、教育の分野で働く人々全員の色々な協力がひとつに実る教育共同体であります。

両親は、子供たちにとって最初の先生であり、自身の信仰にもとづいた生活によって子供を導き、幼いころからキリストの精神を身につけて生きることを教えます。家庭は、人が生まれ、人間としての成長と共に信仰を育てるのに最も恵まれた場所です。家庭は子供たちが共同体にふれる最初の場であり、社会的な美德、

神を知ること、隣人愛などを学ぶ場でもあります。

けれども子供たちが成長するにつれて、両親は、自らの義務を十分に果たすため、社会の助けを必要とするようになりまます。そこでまず第一に、親は、経済的な問題抜きで自由に、学校を選ぶことができなければなりません。

カトリックの教師は、親から委託されて引き受けたこの補完的・補助的な役目についてよく自覚している人々です。さらに、自由に選んだこの使命を果たすことによって、家庭と教会との協力者として働いていることを自覚しておられます。

先生方、そしてご両親方、カトリックの学校が自らの提唱するところ

**□学校は家庭の延長であり補いとなるものであることを考えて、選んだ学校をよく見守り、積極的に協力してください。**

や目的を達することができるとか、か、すべて皆さん次第なのです。以前にもお話ししましたが、もう一度くり返したいと思えます。「カトリックの学校の将来は、皆さんの手の中にある」と(カトリックの教師たちへ)1984・9・12)。たゆまぬ努力が要求されています。それには、学生、両親、教師、指導者、牧者、つまり関係者すべての協力が必要です。

神の民のメンバー全員が、この共通の使命を共に果たすべき責任を負っていることを自覚しなければなりません。

とくにご両親のみなさんにお願います。みなさんの良心にしたがって学校を選んでください。ただし、選ぶだけにとどまらずに、学校は家庭の延長であり補いとなるものであることを考えて、選んだ学校をよく見守ってください。学校が最善を尽くせるよう、積極的に協力してください。子供は学校にあずけたのだからと言って、学校に全てを任せるような無責任な態度をとらないでください。

修道会関係者のみなさん、教育史上記念されるべき働きをされたみなさんには、カトリックの学校が、非キリスト教国においてさえも博してきた信望を、守ってくださいようお願いいたします。今日の多くの困難や、福音の証人としての新しい道を求めるあまり、人々の向上と福音化というこのすばらしい活動分野を決してやすやすと放棄するようなことになつてはなりません。カトリックの学校は、かつてなかったほど重要性を増しています。

親愛なる生徒のみなさんにも、お願いがあります。みなさんが可能性と希望に満ちた将来を望むなら、ご両親と先生方が用意して下さった恩典をじゅうぶん活用してください。なまぬるい一生を送らないでください。そうすればみなさんにも、学校や住んでいる町に対して、少なからぬ貢献をすることができるとすか

(一九八五・三・九)



# 説教・講話・書簡等の抄訳

## 聖マテオ福音記者の

# キリスト論と教会論



大聖グレゴリオの九百年祭にあたり、福音史家聖マテオの聖遺骨に敬意を示す機会を得ました。

福音史家聖マテオは幾世紀にもわたって、この地の人々の霊性、つまりキリストとその教会を中心にした霊性の励ましのもとでありました。新約の正典の第一に来るマテオによる聖福音中もっとも大切なのは、単なる預言者や政治的解放者といったものではなく、「神の子」というキリストの称号です。嵐が静まったあと、弟子たちはキリストの前にひれ伏して、「ほんとうにあなたは神の子です」と叫びました。(マテオ14・33)

同様に、フィリッポのカイザリア地方にいたとき、ペトロは厳かに宣言しました、「あなたはキリスト、生ける神の子です」と。(マテオ16・16) この信仰宣言については、大司祭カヤファの言葉にもあらわれます。「私は生ける神によってあなたに命じる、答えよ、あなたは神の子キリストなのか。(マテオ26・63)そしてイエズスは躊躇せず、そのとおりであるとお答えになりました。神なる御方ですから、そのおことばは権威あるものであって、私たちの信仰の確実さの保証ともなります。

聖マテオが教会とは何であるかについて強調するところは意味深長です。ペトロは教会の可視的な頭であります。「私はあなたに天国の鍵を与える。(マテオ16・19) 教会の生き方(人生の法則)は山上の説教(マテオ5・7)にあり、教会の生命は祈りです。「あなたたちはこう祈るがよい、(天にましますわれらの父よ、……)。(マテオ6・9・13)そして聖体は糧であります。「取って食べなさい。これは私の体である。(マテオ26・26) 人々の相互の愛は、教会が他と異なることを示すしるしです。「あなたたちの敵のために祈り、あなたたちを迫害する人たちのために祈れ。(マテオ5・44) さらにまた、「地獄の門もこれに勝てぬ(マテオ16・18)とあるように、教会の保証となるのは、その「不滅性」(Indefectibility)であります。

聖マテオは以上のように明確に、キリストに対する私たちの信仰と、人々の救いのためにキリストがお建てになった教会の堅固な根拠とを指摘しています。

キリストに対して、教会のなかで、聖マテオの模範にならって、生き生きとし、首尾一貫した証をするように、私たちは招かれています。皆にも、福音をひろめ人々をキリストの愛へと近づける使命が与えられました。聖なるものに対する感覚と神への忠実、福音の教えの要求に従った生活を営む必要がかけりを見せているとき、それらを宣言する責任はみなさんにもあるのです。

キリストの御血に贖われたこの世をさらに一層正義にかなった、人間にふさわしい世界にする仕事こそ、教会という共同体の、教会としての道行でなければなりません。みな美しい教会を大切にしてください。そこで救いの秘義が現実となるのですから。使徒たちの後継者であり、一致の目に見える絆である、司教とみなさんの信仰を生き生きとさせ、聖体のパンを割きます。その結果、みなさんは、一つのからだ、つまりキリストの神秘体となります。

この超自然の現実から、皆さん方一人ひとりのための仕事、すなわち一つのからだの構成員として日々の生活のなかで、この宝物を兄弟姉妹、遠くにいる人にも近くにいる人にもわけ与えてあげる義務がでてくるのです。

教会のなかでは、各々がこの交わりを強めるべく貢献するよう招かれています。一人ひとり、受けると共に与えなければなりません。不必要な人間などいけませんし、だれも除外されてはならないのです。事実、霊の力は全員に与えられました。小さき人、老いた人、病に伏す人、社会のすみっこに押しやられている人とかく全員に霊の力が賦与されています。たとえ、一番すみっこにいても、信仰と愛に生きる人はだれにもまして値うちのある存在です。神秘体という現実をまさに「生きて

いる」からです。その神秘体のなかでキリストは、頭が体のなかで果たすように、生命を与えかつ一つに集める働きをしておられます。

神の靈感を受けた証人である聖マテオのキリスト観と教会観を実践に移したいものです。聖マテオがキリストとその教会を人々に見事に教えたように、みなさんも紀元二〇〇〇年に入らんとするこの世代の人々に対して、キリストと教会との報道者(布告者、使者)、確かな証人とならねばなりません。聖マテオのみが伝えていた注目のべき言葉をしっかりと読んでください。マテオの福音書には、愛と教導、兄弟的説論の絆が啓示されています。これこそ、洗礼のおかげで、贖われた人々の共同体を構成するに至った人々にとって、永遠の価値を有するものです。

「兄弟が罪を犯すことがあったら、その人とだけ相對して、いさめに行きましょう。聞き入れてくれたら兄弟を得たことになる。聞き入れてくれなかつたら、一人か二人を連れていき、二人か三人のことばを借りてことを片づけよ。私の名によって二、三人の集まるころには私もまたそこにいる。(マテオ18・15・16、20参照)

キリストはこのようなして世の終わり迄、教会のなかになし、働き続けてください。しかしキリストのこの現存は、キリストの御名において集うことと関係があり、信者がキリストに対する信仰に力づけられていることを要求しています。キリストに対するその信仰のおかげでキリストとの生命のつながり、一致が実現するからです。

おうちにお戻りになるとき、どうか、家族の方々と仲間、友人に信仰と希望を持ち帰ってください。

私教皇が祈りのうちに彼らを思い出し、主の御名において彼らを祝福する旨、どうぞお伝えください。(イタリアのサレルモにて、八六・二・十五)



今月の  
おすす  
め  
オプス・テイ創立者小伝(定価一八〇〇円 五三〇〇円)  
神の朋友 エスクリバー著(二六〇〇円 千三〇〇円)  
知識の香 エスクリバー著(二八〇〇円 千三〇〇円)

# 不変の教え

## 章憲礼典 二十年 発布

# 典礼は教会の 秘義を宣言する

二十年後

『典礼憲章』発布以来二十年が経ちました。ここで、典祈の刷新は今の段階にあるのか自問するのでも許されましょう。この数日間みなさま方は、この問いに對してできるだけ客観的かつ包括的な答えを出そうと努力して来られました。

皆さまが提供して下さった数々の証言に照らし、またあらかじめ行なわれた様々な質問を斟酌しても、典礼の刷新は、大方ラテン式典礼の全教会において、共同体としても個人の信徒によっても十分受け入れられていることは明らかです。とりわけ評価されたのは、典礼様式の単純化と各々の国の国語を導入したことでありました。そのおかげで信徒たちは、祭壇上で自分たちの名において、何が宣言され、何がなされているのか、以前にもまして理解できるようになったわけです。

また次のことも、満足すべき点として注目できましょう。すなわち、こうしたしっかりとした人々のいる所で、典礼を祝うに当たり根本的な、そして間断なく再発するテーマについて、すぐれた要理教育が始まったということ。例えば、救いの歴史、過ぎ越しの秘義、契約、様々な方法

でキリストが典礼の中に現存しておられること、キリストの司祭職、職位的司祭職と共通司祭職など、信徒は信仰の内容を理解する面で進歩をとげることができました。

きわめて重要と考えられるもう一つの特徴は、神のお言葉、豊かで滋養に富んだ神のお言葉です。それは深遠な印象を、耳を傾ける人々の心にも生活にも残すことができます。

また、典礼の中で信徒の積極的な参加が実現できたことも忘れてはなりません。以前には「侍者」に委ねられていた聖職者の仕事まで行なわれるようになりました。その後、多くの文書が公布されて『典礼憲章』の規範的な部分が明らかになり、その刷新する部分を適用し、種々の典礼書が次第に刊行されるようになってきたわけです。こうした文書の公布は典礼に対する関心を復活させたのみならず、東方教會的ニユアンスを、理解してもらい靈的に体験してもらい、のにも貢献してきました。こうしてみると、二十年という時間をかけて長い道のりを歩んできたことがわかります。

### 否定的な面

しかしながら、こういったプラス面だけでなくマイナス面も考慮に入

れなければなりません。個人またはグループで抵抗するケースは幾つもありましたし、現在もなお状態は同じです。そのような人々は、典礼の刷新ばかりか大体において公會議の作業

の履行自体を、そもそもの始めから不信の念を抱いて受けとめていました。他方、数々の結果に満足せず、独断的な典礼をとり入れて、神の民の間に混乱や当惑を生じさせるような人々もあつたのです。

なおその上に、自分たちで独自の典礼を作り出す権限を授けられていると信じ込んでいるグループもありました。彼らの典礼は、継続時間と賛美の仕方面でつねに保つべき平衡、すなわち教會の典礼が保持している均衡を欠いています。典礼とは本来、全教會共同体に属するものであつて、重要な分野では、すべてが教會の指示と調和して行なわれるように司牧者も信者も一致していなければならないということをし、忘れてしまつているのである。

### いくつかの指示

以上私が述べて参りましたことは、当然二、三の指示を確認することに なります。典礼刷新の目指すゴールに到達できるよう、また、この会合が期待にそつてより一層内容ゆたかな答えを提供できるように。

最初の指示は、『典礼憲章』の14番が示唆するものです。ここでは「充実した、意識的な、積極的な参加」について述べ、すべての信者は「極

めて特別な配慮を通して」参加するよう導かれるべきであると言っています。しかしながら、靈魂の司牧者たち自身がことを始めるに当たり、万一、典礼の精神と力とを心底から理解していないとすれば、目的の達成は望めないでしょう。

そこで、聖職者、とりわけ若い神学生たちの典礼形成は、神学的、歴史的、靈的、司牧的、法律的の各方面から『典礼憲章』16番参照) スタートしなければなりません。この形成のためには、典礼書とその序論、すなわち『使徒憲章』や『序論』、『一般指針』の中から、神学生が勉強し熟考するのに最もふさわしいテキストを見出すことが重要になります。

ここで第二の指示に入りますが、以上は忠実という旗じるしのもとに進められるべきです。つまり、典礼は教會によって制定されたものであり、聖職者も信者もその所有者ではなく下僕である、という心の底からの確信に基づいてたてられた忠誠の旗じるしのもとに発展させなければならぬということ。このような忠実には、教會自身が認めますような適応——典礼の根本的方针——と調和し、かつ各々の民に特有の文化がそつした適応を必要とする場合、このような適応に對して偏見をもたずオープンな心で対処することも含まれていいます。

このような光のもとに(これが第三の指示ですが、典礼書の指示するところに従うならば)、ある種の条件の下で次のような点を認めることもあり得ましょう。すなわち、礼拝を行なう集いといった具体的な状況に

對して直ちに應じてくれる儀式書を提供し、信者の注意を惹いて積極的な参加をうながすことができるという点。これが正しい創造性です。けれども決して忘れてならないポイントが、真正正銘の創造性は教會の中で生まれるのであつて、典礼内で心と知性をひらき創造主の靈に素直に従うところから生じるといふこと。す。

### 典礼的形成

私はまず第一に、可能な限りあらゆる方法を尽くして典礼的形成への配慮と育成を推し進めていただきたいと考えます。教會の数々の指示に忠実であるように、典礼を行なうまさにそのことの中に本来をなわつて聖なるあの感覚を保持するように。そして何にもまして、神の役目と人間の役目、ハイエラキーと信者たち、伝統と進歩、法と適応、個々の人間と共同体、沈黙と声を合わせようという聖歌との關係に對してすぐれた平衡感覚を保ちつつ、託された仕事に献身して下さるようお勧めしたいのです。

そうすることによって典礼は天國の典礼を復活させます。アンティオキアの聖イグナツィウスによれば、天國では唯一の聖歌隊が形づくられており、聖歌隊の一人ひとりのみならず、イエズス・キリストを通して御父をほめ称えるために、この上なく緊密なハーモニーを生まれさせる。私は私たちの言葉をお聞きになり、私たちの働きによって、私たちが御子の賛歌であることを認めてくださいます。(一九八四・十・二十七)

『教皇様の聲』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

替振郵便 3-72393